

感情は、内面の真実ではない。
感情は、現場で立ち上がる現象である。

感情は、表現の源泉として語られがちだ。

だが現場では、感情は「持つもの」ではなく、
「起きてしまうもの」として振る舞う。

感情は、出せばよいものではない。
吐き出された瞬間、感情はしばしば形を変え、
「それらしく見える何か」にすり替わる。

また、感情は内面の真実そのものでもない。
怒りや喜び、悲しみは、心の奥底にあった本音ではなく、
状況・関係性・緊張・抑制が重なったときに、
表層へ浮かび上がった反応であることが多い。

感情を「本当の自分」だと信じすぎると、
人は感情に引きずられ、
表現は感情の説明へと落ちていく。

感情は、
内側の状態 × 環境 × 制御
この交差点で発生する。

同じ怒りでも、
同じ悲しみでも、
環境が違えば、密度も温度も、立ち上がり方も変わる。

制御とは、抑え込むことではない。
否定でも、排除でもない。
感情が存在できる位置を決める行為である。

観察されない感情は、荒れやすい。
過剰に注目された感情は、肥大する。
距離を与えられた感情は、輪郭を持ち始める。

この距離が、
感情を“状態”へと移していく。

感情は、消さなくていい。
だが、主役にもしなくていい。

感情を素材として扱わないこと。
人格や真実と同一化しないこと。

そのとき感情は、
押し出す力ではなく、
場にわずかな緊張を残す。

出来事としてではなく、
説明としてでもなく、
ただ、そこに残る。

感情は、
扱われた分だけ、
静かに姿を変えていく。

Edition — 価値観の航路
別景：感情

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026